Ⅰ　令和５年度　連雀学園研究の概要（案）

研究テーマ

「知的コミュニケーションを活かした学習指導の工夫」

１　主題設定の理由

学習指導要領では、内容（コンテンツ）ベースから資質・能力（コンピテンシー）ベースへと、カリキュラムの重点をシフトした。子どもが獲得すべき資質･能力として､｢教科共通で育成する資質･能力」と「各教科における見方・考え方をもとに育成するもの」が挙げられており、今後育成すべきものとして重要な目標となる。すなわち「何を知っているか」ではなく、実際の問題状況で「何ができるようになるか」を問うものになり、教科・領域横断的で汎用的なものを中心にとらえられ、児童・生徒に何が身についたのかが重要になってくる。 各教科等の授業や学校教育全体で、そうした汎用的スキルをどう意識的に育てていくかが問われている。知・徳・体にわたる「生きる力」を子どもたちに育むためには｢何のために学ぶのか｣という学習の意義を共有しながら､授業改善を行うことが重要になってくる。また、学習指導要領では､｢我が国のこれまでの教育実践の蓄積に基づく授業改善の活性化により、子供たちの知識の理解の質の向上を図り、これからの時代に求められる資質・能力を育んでいく」ことの重要性が述べられている。このためには学びの量とともに、質や深まりが重要であり､｢主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善への取組が必須である。

本学園では、今までの研究から、日常的に教師の意図的な働き掛けのもと、知的コミュニケーションを創み出し、活性化させ、学びを深めていくための教師の力量を向上させていくことが必要であることがわかった。また、知・徳・体の調和のとれた教育活動を学園全体で行っていくことが大切になってくる。更に､問題解決能力でもある問題発見力や自己評価力などをはじめ､学習している単元のみならず､他教科でも生かすことができる汎用的能力など、様々な能力を学習や生活の場面で活用していくことを目指していくことも必要であると考えている。

今まで研究してきた知的コミュニケーションを活かした課題・問題解決的な学習を継続して取り入れていくことが授業改善につながり、本学園の目指す「学び続ける人」｢共に生きる人」および「心と体を鍛える人」の育成につながると考え、本テーマを設定した。

２　研究の内容

〇知的コミュニケーションとは、
　他とかかわることにより、自分の考えや集団の考えを高め発展させること

(1)「知的コミュニケーション」について

本学園では、小島(2013)の考えを基に、協働による創造的な活動を活性化させるためには、知的コミュニケーションが必要であると考え、「他とかかわることにより、自分の考えや集団の考えを高め発展させること」と定義付けた。つまり、知的コミュニケーションは、協働の視点をもち、よりよい考えやものを創り出すために、「合意」可能な地点を探り合うコミュニケーションである。その過程においては、相互に知識・技能や経験を活用しながら思考を練り上げ、修正し、発展させながら、よりよい方向に向かって、双方が歩み寄ることが求められる。まさに、児童・生徒の問題解決能力を育成するためには、思考場面で知的コミュニケーションの活用が有効である。問題解決

過程において、個人個人が自分の考えをもち、他と相互にかかわりながら、自分の考えや集団の考えを深め、発展させていく活動こそが知的コミュニケーションが行われている場面と捉えた。（図１）

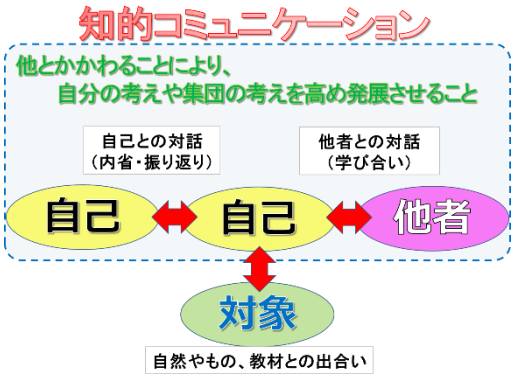


図１　自己と他とのかかわりと知的コミュニケーション

知的コミュニケーションは、よりよい人間関係づくりや思考を拡げることにもつながると考えられる。なぜなら、人は他者と互いに知識・技能や経験を共有できたときに安心感を得ることができ、互いの交流が深まるからである。また、互いの考えや意見が多様で異質なものであると、交わされる質問、比較、批評、批判等が活発になり、思考をより拡げていくことにつながると考えられる。児童・生徒は他者からの心の安定や批評、批判等の客観的な根拠を得ることができ、自分の考えに自信をもって、他者とのやりとりを繰り返すことによって、グループとして課題・問題解決に向けた一つの方針や方向性も明確になると考えられる。

これらのことから、人間関係の深まりを前提とし、相手の考えをより深く理解しようと知的コミュニケーションを活かした学びを行うことで、自尊感情を育み、他と高め合いながら学び続けることができると考えた。

(2)　知的コミュニケーションの行い方（学び合いのさせ方）について

学び合いの質を高めるためには、思考をする際の個別の活動を位置付ける必要がある。石井（2007）は、「個別の指導の充実こそが、学び合いの質を高める」と述べており、集団での学び合いの前に、個別の活動を取り入れることの有効性を述べている。また、「学び合いにおいては、他者による影響を自らの所産に結びつけることが、質的に重要な位置を占めている」としており、振り返りの活動を習慣付けることで、「自己の所産を修正したり、強化するプロセスが機能したりすることで、学び合いは促進していく」と、自己評価をしていくことが学び合いをしていくためにも必要であると述べている。

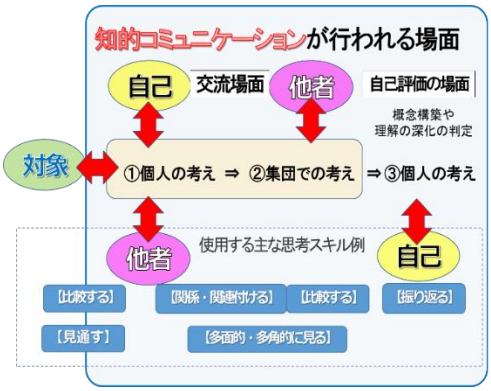


図２　知的コミュニケーションが行われる場面

そこで、本学園では、図２のような思考や活動の流れを大きな枠組みとして取り入れ、他とかかわり、自分の考えをもちながら、知的コミュニケーションを行っていくことが、学び合いの質を高めることになると考えた。

(3)　「知的コミュニケーション」と「主体的・対話的で深い学び」の関連について

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(2016)によると、「主体的・対話的で深い学び」の実現について以下のように述べている。

> 特定の指導方法のことでも、学校教育における教員の意図性を否定することでもない。教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである。学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることである。

また、「主体的・対話的で深い学び」について、以下のように考えられる。

「主体的学び」
　学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる。
「対話的学び」
　子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通し、自己の考えを広げ深める。
「深い学び」
　習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深い理解をしたり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりする。

これらを踏まえると「主体的・対話的で深い学び」と「知的コミュニケーションを活かした学び」は、ほぼ同義と考えられる。しかし、学びの深まりを促進するためには、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」が鍵となる。特に、「考え方」に関しては、汎用的に使用できる「連雀思考スキル」を用いて「思考の枠組み」を教育活動で取り入れていくことで、知的コミュニケーションが促進されたり、学びの深まりを得られたりすることができると考える。（図３）

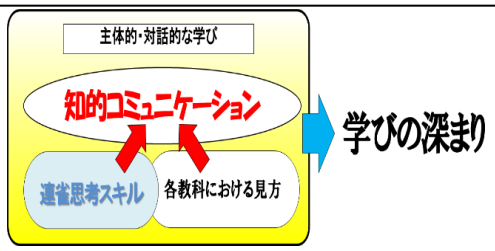


図３　知的コミュニケーションと思考スキル

(4)　連雀思考スキルについて

資質・能力を育成するには、各教科等の見方・考え方を働かせることで、深い学びに関連してくる。2015 年「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（案）別紙１　各教科等の特質に応じた見方・考え方のイメージ（案）」では、中学校の例として、見方・考え方についてまとめられている。ここでいう、「考え方」は「思考の枠組み」と考えられ、児童に身に付けさせたいスキルとして学園で援用することを考えた。泰山裕（2011）によると、「思考を具体的に記述した言葉を「思考スキル」とし、「こどもに求める思考をより具体的な言葉に置き換えることで、学習活動が具体的になり、そのための支援が明確になります」と、思考スキルを身に付けることの有効性を述べている。

また、角屋（2017）によると、「教師は、「考えなさい」と指示し、子供に考える時間を提供しているが、考える「すべ」を育成していない」と述べている。つまり、思考力を育成するためには、子どもが思考する際の、「考え方」を獲得させることが重要になってくる。また、思考とは、「子供自らの既有経験をもとに対象に働きかけ、新たな意味の体系を構築していくこと」、思考力の「すべ」を、「子供が対象に関して自分で目標を設定し、既有の体系と意味付けたり、関係付けたりして、新しい意味の体系を構築していくことが必要になる。この思考としての意味付けや関係付けには、違いに気付いたり、比較したり、対象と既有知識を関係付ける等の「すべ」がある」と述べている。

これらのことからも、思考の枠組みを学園内で共通に使用することができれば、思考することを具体的にすることで、子どもによりわかりやすい指示や支援をすることができるだけでなく、学園全体として思考力を育てることができると考えらえる。

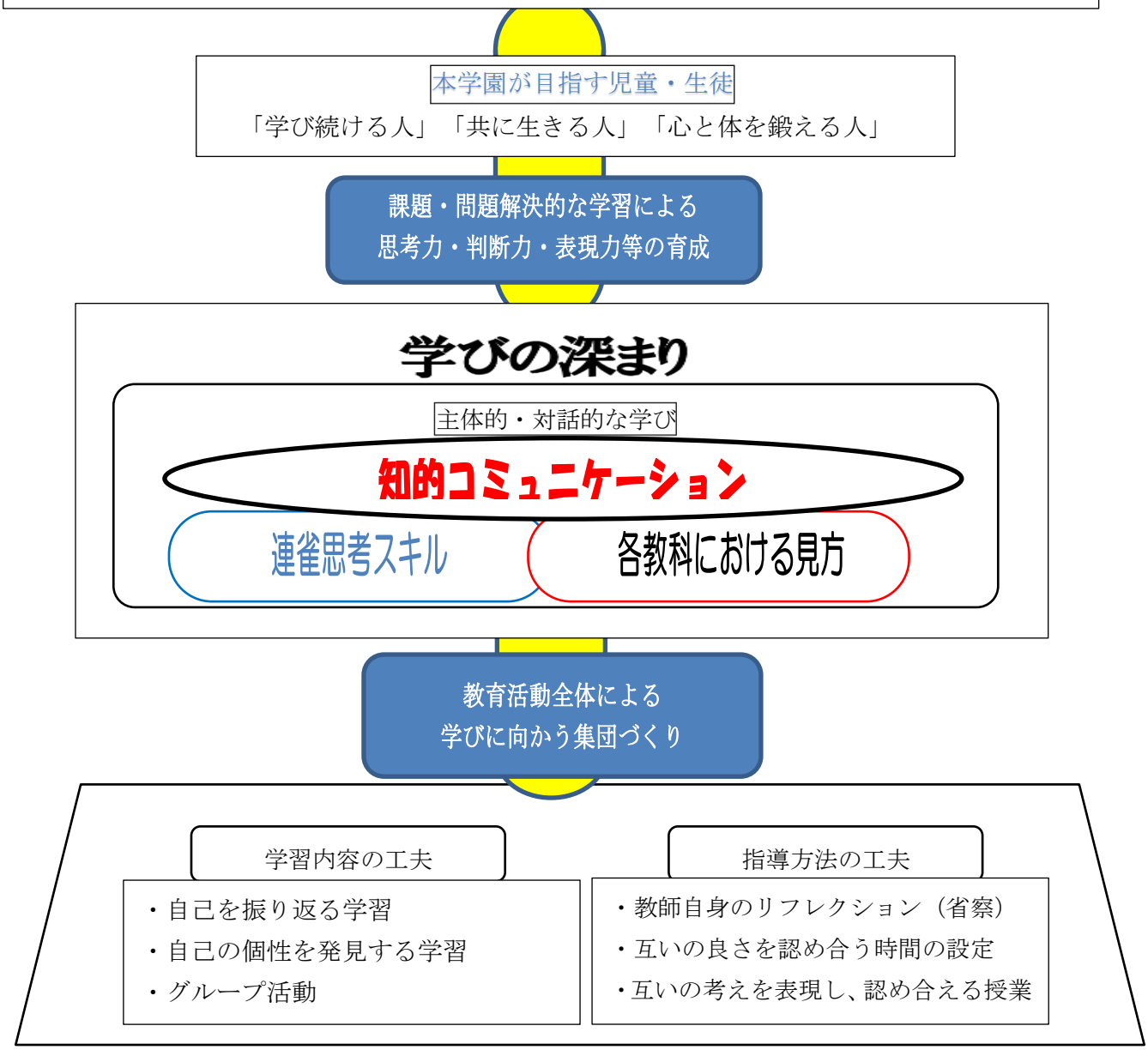
表１　連雀思考スキル（学園共通）

思考スキル	意味
比較する	物事を類比・対比する。
見通す	行為の効果や影響についてのイメージをもつ。
多面的・多角的に見る	多様な視点や観点、異なった立場で対象を見る。
関係・関連付ける	学習事項同士、もしくは実体験・経験とつなげて示す。
振り返る	視点や観点をもち、学習したことや自己の活動、自己の成長についての意見をもつ。

今まで研究した学園で共通する連雀思考スキル（表１）５つと各教科の特性に応じた思考スキルを活用し、子どもにどの場面でどのような考え方をさせるのかを位置付け、授業研究をしていく。

３　研究仮説

本学園の教育活動全体において、学習内容や指導方法の工夫により学びに向かう集団づくりを行い、知的コミュニケーションを活かした課題・問題解決的な学習指導の工夫を行えば、他と高め合いながら学び続ける力が育まれるであろう。



４　研究の視点

研究主題に迫るための視点については以下の３点である。

（１）問題解決的な学習

知的コミュニケーションは、まず課題・問題解決的な学習のときに行われる。その教科や領域の特性や内容から、児童・生徒に課題意識や問題意識をもたせる仕掛けを行い、課題・問題解決的な学習が行われるようにしていく。

（２）ＩＣＴ機器の利活用

一人一台端末を十分に活用し、個の課題を解決したり、個に応じた指導を行ったりと「個別最適な学び」を進めていく。また、一人一台端末を活用して、「協働的な学び」も推進し、知的コミュニケーションを活かした学びを行っていく。

（３）学びに向かう集団づくり

知的コミュニケーションを行う際には、グループでのかかわりが必須となる。このグループでのかかわり方の高まりを学園全体で目指していきたい。年間を通して発達段階に応じ、学びに向かう姿勢やグループ活動の行い方などを意図的に指導していく。

４　研究成果の検証方法

研究の成果は、各実践授業の中で行われた児童・生徒の記録や変容などの実践的な検証と、学園内で行われたアンケート分析などによる数値の変容を用いた検証を行っていく。

実践授業においては、１単位時間の授業だけの評価ではなく、単元などを通して形成的に評価を行っていく。なお、形成的に授業ごとに評価を行っていくため、自己評価を行っていく項目については、各部会で設定し、手だての効果の検証に用いる。

学園全体の検証の成果については、hyper-QU について経年で調査し、授業の実践や学級内での様子などを表す調査などの変容を見ながら、総合的に成果を検証していく。